

一般社団法人
日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
VOL.49 No.3
2025.7.1
(通巻 289号)
禁転載

CONPT

Conference for Newspaper
Production Technique-Japan

広報委員会編集
編集人 井上 努
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT-JAPAN
50th Anniversary



CONPTは創立50周年を迎えました

日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)は、今年5月に創立50周年を迎えました。

本号では、清水英則会長の「50周年の決意」、日本新聞協会の中村史郎会長、

同技術委員会の近藤るみ委員長の両氏からいただきました祝辞、CONPT副会長・委員長による「50年を語る」およびこの5年間の活動記録で50周年特集を構成しました。

目次

CONPT50周年の決意	日本新聞製作技術懇話会 会長	清水 英則	3
祝辞	日本新聞協会 会長	中村 史郎	4
祝辞	日本新聞協会技術委員会 委員長	近藤 るみ	5
CONPTを語る			6
CONPTの歩み 2020～2025			12
新局長に就任して	岩手日報社 総合メディア局長	高橋 直人	14
	河北新報社 技術局長	阿部 好彦	15
	山陽新聞社 制作技術局長	秋山 茂男	16
	日本経済新聞社 製作本部長	加藤 謙一	17
	福島民報社 システム・グラフィック局長	高橋 英毅	18
	南日本新聞社 経営企画局長兼印刷局長	鷓木こう平	19
第5回定時総会開催			20
CONPT2025年度事業計画			20
美味あっちこっち	信濃毎日新聞社 印刷局長	中村 賢二	21
第2回製作技術研修会のお知らせ			21
会員消息			21
会員名簿			22

●表紙製版・組版・印刷：(株)デイリースポーツ

「最適解」を求めて邁進

一般社団法人
日本新聞製作技術懇話会 会長

清水 英則



日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)は本年5月に創立50周年を迎えました。50年という大きな節目を迎えることができましたのも会員社、新聞社・

日本新聞協会の皆様をはじめとした関係各位のおかげであり、厚く御礼申し上げます。

1975年(昭和50)5月21日、CONPTは新聞社と表裏一体となって新聞製作技術の改善、向上に資することを目的に設立されました。設立に先行して第1回JANPS(新聞製作技術展)が72年に開催されました。当時JANPSは毎年開催されるほど盛況だったこともあり、出展企業を母体に新聞社並びに新聞協会の支援を得て設立に至りました。初代会長は故人となりましたが岡村雄一氏(東京機械製作所)が就任、CONPTの基礎を築かれました。

50年を振り返りますと、ほぼ半ばとなる2000年頃までは新聞発行部数も上昇を続け新聞製作における技術革新は飛躍的に進み、設備投資も旺盛で、新聞業界発展の時代でした。CONPTも50社を超える会員社が一体となって「JANPS」、「CONPT-TOUR」、「新年名刺交換会」の3大イベントを軸として積極的な活動を展開してまいりました。2000年以降になりますと、インターネットの普及率が驚異的に高まりデジタル社会が到来し、新聞業界を取り巻く環境も大きく変化。特にこの5年、

10年におきましては厳しさを増すばかりで、CONPT活動も通例イベントの他に新たな施策を迫られました。新聞社との対話によって課題を抽出し、解決に向けて取り組むことを目的とした「技術対話部会」がその一つでした。CONPTのシンボル事業であったJANPSについても開催頻度の見直しが進み、開催有無について毎回議論される状況になるといったこともあり、CONPT事業にある種の閉塞感が生まれ始めた時期でもありました。

さらに、記憶の新しいところになりますが、新型コロナウイルスの蔓延によりCONPT事業も大きな転換を余儀なくされました。大変厳しい時期ではありましたが、新聞業界そしてCONPTの現状を見詰め直し、今後の展望を見据えるために必要な転換期ではなかったかと考えております。

こうした思いをもって、この1年を顧みますと、JANPS2024の代替イベントとして企画いたしました「製作技術研修会」、「JANPS in page2025」を含めて従来の3大イベントを全て実施することができました。そしてその全てのイベントが新聞業界の現状に即した最適なものになり得たと感じています。

現在、国民を取り巻く環境は人口減少による深刻な人手不足、災害の激甚化、環境問題、さらには経済的な不確実性などさまざまな課題が絡み合っていると云えます。混迷の時こそ新聞社が発信する確実で信頼できる情報がより一層求められます。CONPTは50年前に掲げた理念を胸に刻み、全会員社一丸となって新聞発行を技術面で支えるために邁進します。CONPT事業活動への引き続きのご理解とご支援をお願い致します。

新たな技術トレンド見据えて

一般社団法人日本新聞協会 会長

中村 史郎



日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)の創立50周年を、日本新聞協会を代表し、心よりお慶び申し上げます。

懇話会は1975年5月、新聞製作技術の改善と向上を図る目的で、新聞製作関連メーカーによって設立されました。それから50年、新聞社の情報発信は紙に加えてデジタルにも広がっています。当時に比べて格段に効率的で高品質な情報発信が実現できている背景には、懇話会会員各社の多大なる挑戦とご尽力があったことは言うまでもありません。

特に、懇話会の活動の大きな柱でもあるJANPS（新聞製作技術展）は、2018年までに23回開催され、最新鋭の技術が一堂に会する展示会として、新聞製作の進展に大きく貢献してきました。

新聞製作を取り巻く環境が大きく変化し、時代の流れを踏まえた展示会の姿を模索する中で、本年2月、公益社団法人日本印刷技術協会(JAGAT)主催の「page」とジョイントした「JANPS in page 2025」が開催されました。新たな形での展示会とすることで、新聞関連企業だけでなく、商業印刷などさまざまな業界の方々との情報交換、交流の機会にもなりました。

懇話会はJANPSのほかにも、さまざまな活動を通じて、新聞社とメーカーの交流、技

術力向上に取り組んできました。海外の先進的な技術を視察するCONPTツアーで得られた貴重な知見は、日本の新聞製作現場に新たな視点をもたらしました。また、多種多様なテーマで開催されるセミナーや研修会は、新聞社にとって知識や技術力を高めることができる貴重な機会となっています。

近年、スマートフォンの急速な普及により、人々の情報接触のあり方が劇的に変化しています。さらに、生成AIをはじめとする新たなテクノロジーの登場は、情報伝達のあり方に大きな変革をもたらしています。社会全体のデジタル化が進む中で、紙の需要の減退、これにともない新聞製作に関わるメーカーの事業撤退や縮小が相次ぎ、新聞のサプライチェーンに大きな懸念も生じています。

しかし、国民の知る権利にこたえ、民主主義の発展を支える新聞の重要な役割は、決して変わるものではありません。情報が氾濫する現代にこそ、新聞の存在意義は高まっています。そのためにも効率的で高品質な新聞製作体制を維持するとともに、新たなデジタルサービスを展開する高度な技術力が求められます。

懇話会会員社の皆様には、これからも時代の変化を的確に捉え、新たな技術トレンドを見据えた活動を推進していただきたいと願っております。最先端技術の活用、環境負荷の低減に向けた取り組み、効率的な製作技術の開発など、多くの課題にソリューションを示していただくことを期待しています。

創立50周年をあらためてお祝い申し上げますとともに、会員各社の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

協働の時代 さらなる革新を

日本新聞協会技術委員会 委員長

近藤 るみ



一般社団法人「日本新聞製作技術懇話会」(CONPT-JAPAN)の創立50周年、誠におめでとうございます。1975年(昭和50)5月の設立から半世紀の節目

を迎えられたことは、清水英則会長(清水製作代表取締役)をはじめ、諸先輩方のご努力のたまものであり、心よりお喜び申し上げます。

私は1990年(平成2)、活字からコンピュータに紙面制作が変わる変革期に、毎日新聞社に入社いたしました。新聞記者は取材相手から話を聞けないと、原稿を書くことができません。一方で私たち新聞技術者は、メーカーの皆さんの「伴走」に助けられ、技術開発を続けてまいりました。

私の入社当時、組版端末はジョイスティックと漢字やコマンドがぎっしり並んだ盤面の文字を拾いながら、紙面を作る専用端末でした。当初は障害も多く、夜勤の際、「紙面が出ない」トラブルに見舞われ、胃が痛くなる思いをしたことも何度もありました。

当時に比べ、現在のシステムはCMS、通信社受信、広告、CTS、紙面配信、CTPなど様々なシステムが完成形となりました。特にCTSでは、組版だけでなく、紙面管理も進化し、広告システムからの情報で自動面建て、工場にあるCTP製版も自動で行われます。

自動化が完成するまで、メーカーの開発者の方々と協議を重ねました。外部からのご指

摘は新鮮で、私どものシステム開発に大きく寄与していただきました。変革期の新聞技術はゼロからのスタートであり、メーカーの皆さんとの協働のたまものだったと思います。

残念なことですが近年、紙の新聞購読者数は加速度的に減り続けています。これまでのようにハードウェアの保守期限に合わせて、各社が単独でシステムを更新するのは厳しいのが現状で、業界全体で協働する時代に入っています。ライバル社との間でも連携する動きが今後も強まっていくでしょう。メーカーの皆様には、こうした背景をご理解いただき、他社とも共有・活用できるような新たなアイデアのご提案をご検討いただければ幸いです。

2025年2月に行われたJANPS in page2025はコンセプトである「共奏」にマッチして、素晴らしいイベントになりました。コロナ禍や出展社の減少から2018年を最後にJANPSの開催は見送られていましたが今回、新聞技術の新しい情報提供の場ができたことはとても嬉しく思います。

また、CONPT-TOUR(海外新聞事情視察団)や国内研修など、国内外の活動も再開したとうかがっております。今後とも、皆様の活動がより充実したものになりますようご期待申し上げます。

デジタル技術を使い、ビジネスモデルや業務を変革するデジタルトランスフォーメーション(DX)により、新聞業界もさらなる技術革新が求められています。懇話会および会員各社の一層の飛躍をご祈念するとともに、10年後、20年後のお祝いの日も、私どもが一緒に迎えられるよう、気持ちを新たに励みたいと思います。

新聞界の発展に貢献することを目的に、1975年5月に誕生した日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)。

50年経った今、CONPTの歩みを振り返るとともに、これからの活動について語り合った。

CONPT50年 これまで to これから

▽出席者：林 克美 副会長
並田 正太 副会長
阿部 浩之 クラブ委員長
福島知美子 企画委員長
井上 努 広報委員長
(司会は木暮喜彦マネージャー)



日本新聞製作技術懇話会の設立総会。会員は23社だった
(1975年5月21日)

【活動をふり返って】

司会 今回、CONPT50周年を語るにあたって、当会副会長と3つの委員会の委員長に参加いただきました。この中でCONPTの活動歴が最も長いのは林副会長です。これまでの活動の評価や今後の在り方などについて、まず林さんから、続いて並田副会長からお話を。



林 確かに随分前からになります。私が新聞の仕事に携わってから今年で40年ですからね。実際には、弊社のJANPS出展が初めてのCONPTイベントへの参加です。確か当時はビッグサイトではなかったですね。先輩に言われるままブースの展示物の説明を行いました。

私事はさておき、新聞界にCONPTは根差すことができていると感じています。12月になると加盟社や新聞社から、「新年の名刺交

換会はいつ？」と聞かれたり、CONPT-TOURの予算を毎年確保していただいたり。工場見学などで訪問しても実にきめ細かく対応していただけます。CONPTの活動に関心を寄せていただけることは、「有難い」ことです。

並田 当会は設立時に「新聞界のために努力、貢献する」という使命を課しました。CONPTの先輩方が、この使命を果たすべく努力を続けてこられて、現在がある。50年といえば、「五十にして天命を知る」という論語の言葉がよく出てきます。創立50周年を迎え、私たちに与えられている使命を改めてCONPT一同で確認する、ということでしょうか。

林 CONPT創設に尽力された初代会長の岡村雄一さんに初めてお会いしたのは1997年、初めてCONPT-TOURに参加した時のことでした。米国ニューオーリンズの展示会視察

新聞界に根差すことができた…と思う

に現地参加させていただきました。

同業他社が大勢で技術視察を行うことへの想いをお聞きし、その場があることの「有難さ」を知りました。この時、岡村さんの想いが私に灯をつけたのかもしれませんが。その後、CONPTの活動に参加するようになり、今を迎えています。

司会 CONPTは2021年7月に非営利型の一般社団法人に衣替えしています。組織的には大きな変更だと思いますが、この件については。

並田 当会は発足してからずっと任意団体でした。CONPT活動の公共性や公益性、コンプライアンスの問題を考えたら、「このままではイカンだろう」ということで、当時の評議員会が法人化に踏み切る決断をしました。

役員の選任などにあたっては、それぞれの会社にご協力いただき、ご本人の快諾もいただいて、恙なく船出することができました。感謝しております。



一般社団法人日本新聞製作技術懇話会の設立総会。コロナ感染防止のため広い会場を使用して、オンラインも活用した (2021年8月24日)

【クラブ委員会—イベントの新しい道】

司会 では、CONPT技術研究会や製作技術研究会、技術懇談会などの催事を担当するクラブ委員会の阿部委員長から、担務に関することやその他、現在考えていることなどについて、お願いします。

阿部 新年の名刺交換会で清水英則会長が挨拶したように、今、CONPTは大きな転換期に立っています。これからの新しい時代を切り開くために、新聞社の皆さんと議論を深めていくことが重要ですが、同時に我々CONPTの中でも色々議論して新しい道を探っていかなければいけないと考えています。



そうした中で考えているのは、上坂義明元会長が以前お考えになっていたことと概ね同じことですが、会員社のCONPT代表者の皆様のご意見を伺う会を催してみたい、ということ。CONPT担当者の方とは委員会でお会いできますが、代表者の方々とはほとんど接触がありません。一度お集まり願って、CONPT活動へのご意見やご要望を伺ってみたい。そして、TOP同士のつながりで、CONPT会員各社の垣根を越えて、新しい製品開発を行える協力体制ができるといいな、などと大きな夢を見えています。

司会 新しい試みとして、昨年秋に製作技術研究会を開催しました。

阿部 新聞社に向けた企画として、新聞社の下流工程の皆さんを主な対象に、工場見学とセミナー、懇親会をセットにした「製作技術研修会」を昨年11月に開催しました。これからの印刷を担う各社の若い方々にご参加をいただき、最新の製作設備を学び、そして人的交流を広げていただくことが目的でした。ご参加の皆さんからは、非常に好評でした。業界全体の持続と発展のために、今後も開催を続けていきたいと考えています。次は10月を予定しています。ご期待ください。

並田 新聞界の発展、関連技術の向上のために個社が切磋琢磨、競争することが大事だと思いますけど、昨年秋の「製作技術研修会」

新しい道を探る 若い人の感性に期待

が好評だったと聞いて、業界が足並みそろえて新聞界の持続・発展のためのイベントなどを継続して企画・実行することも重要だと実感しています。



新聞社の製作系を対象に初めて開いた製作技術研修会
(2025年11月15日)

阿部 CONPTについて言えば、各社各位これからも可能な限りCONPTを続けてほしいと思っています。新聞業界の今後を展望し、各社さまざまなお考えがあると思いますが、会員各社が協力し、若い方々の感性と馬力で、新聞業界で新しいビジネスを開拓してほしいと願っています。

福島 CONPTには、さまざまな技術をもつ企業も参加してほしいですね。上流、下流の分野にとらわれず、色々な視点を持っている企業——後ほどお話しますが、先のJANPS in page2025では「新聞に関する総合技術」の展示会であることを謳っています——こうした様々な技術をもつ企業の集まりになれば良いと思っています。

阿部 勧誘努力が求められますね。



【企画委員会—JANPS & CONPT-TOUR】

司会 続いて、企画委員会です。ここはJANPSなどの展示会 やCONPT-TOURといった大きなイベントを担当しています。

福島 CONPTの代表的な活動の一つが



JANPSです。当時のことは知りませんが、1回目を1972年に東京・北の丸の科学技術館で開催したのが始まりで、以降、回を重ねながら業界の技術進展を

映す場として成長してきたと聞いています。第14回(1997年開催)からは東京国際展示場(ビッグサイト)へ会場を移し、第21回(2012年開催)から3年ごとに開催に変更されました。

司会 2020年以降、コロナ禍のためリアル展示会が難しい時期が続きました。

福島 2021年に第24回を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、やむなく延期することになりました。ただ、展示会が中止になっても情報発信の手を止めてはいけないという思いから、2022年には新たな取り組みとして『CONPTオンライン展示会』を開催しています。オンライン開催ではありましたが、関係各署とのつながりを維持・強化する貴重な機会になったと思っています。遠方の方にも参加いただけたことで、展示会の新しい可能性も感じました。

司会 そして今年2月にJANPS in page 2025を開催。

福島 リアル展示会にこだわり、日本印刷技術協会のpage展に出展するという新しい形をとりました。page2025の「共奏」というテーマもCONPTの想いとマッチして良かったなと思っています。今回は、「新聞に関する総合技術を展示」というアピールを強く出して、JANPSの新しい方向付けができたのではと思っています。

阿部 「次はどうする」というのが皆さんの関心事になると思うけど…。

福島 次回へ向けた議論として、いままで

「新聞に関する総合技術」 JANPSの方向づけができた

のような上流下流一緒になったJANPSをどうするか、今回と同じような出展形式にするのか、開催頻度は？——などがテーマとなりますが、CONPT内で議論を深め、日本新聞協会の技術委員会とも密接に連携して、業界内のベテラン企業と次世代を担う若手・異業種との協業展示も視野に入れていきたいと思っています。単なる製品紹介にとどまらず、「業界のこれから」を具体的に示す機会にできたらという思いがあります。

司会 CONPT-TOURは昨年で第45回を数え、日本新聞協会にも協賛をいただいているCONPTを代表的する活動の一つです。2019年に実施したあと、コロナ禍で4年間中断していましたが、昨年、8年ぶりにリアル開催されたdrupa2024の視察を中心としたツアーを実施しました。

林 私はCONPT-TOURの企画に関わっていますが、TOURを語る上で欠かせない2人のことを、まずお話ししなければいけないと思っています。一人は木村禮さん。この方は東京機械製作所の人でしたけど、2015年まで22年間通訳を務めていただきました。現場説明の長い話も木村さんの手にかかる

と、ポイントだけを的確に訳してくれました。ある時、木村さんから上流系のテーマで私に通訳をするように言われました。英語が堪能ではない私ができるはずがありません。でも木村さんは言いました。あなたは話の内容を理解しているから大丈夫だよ。ただ言葉を翻訳するだけではダメなんだよ、と。終わったあとに、良かったよ、とかけていただいた言葉は忘れられません。

井上 映画の字幕の名人芸みたいな話です

ね。

林 もう一人はWAN-IFRAのマフレート・ワーフェルさん。2004年にCONPT-TOURがIFRA本部を訪れた時、岡村さんと懇意にされていたIFRA元会長のボリス・フックスさんから紹介されました。これ以降、ヨーロッパに重点を置いて視察を行うようになりましたが、それができたのは、ワーフェルさんが色々な新聞社の特長や交渉の窓口を教えてくれたり、事前に話を通しておいてくれたりしたことによります。

WAN-IFRAの展示会では、CONPT一行を引き連れて会場を案内、昼食もご馳走してくれました。2019年の展示会を最後に引退して2022年に亡くなられました。

司会 CONPT-TOURとなると貴重な見聞だけでなく、愉快的話とか失敗談とか、いろいろ話が長くなります。ここでは、今後について、考えていることなどをお願いします。

福島 これまで、ヨーロッパを中心に視察してきましたけど、今、紙の新聞については明るい話がなかなか聞こえてこない状況です。今年は派遣を見送る予定ですが、「次はどうか」と情報収集を続けているところです。

並田 WAN-IFRAのイベントをみても、AIを含めたデジタル関連の動向やニュースルームの在り方などに関して、スピーカーが出てきて話をするというのがメインになっているようで、下流部門で見るべきもの、というのが難しい。WAN-IFRAでも展示会も開催の声を聞かなくなりました。

井上 印刷工場は集約されています。下流



マンフレート・ワーフェルさん
④と木村禮さん
(CONPT-TOUR2005)

木村禮さんの名人芸 ワーフェルさんの力添え

工程で日本にはないもので、皆さんが興味深く見られるものといえば、水なし印刷とか大きなドラム型インサーターがあるメールルームとか。

福島 個人的な興味から言いますと、CONPT-TOURで話を聞きに行ってみたく思うのは、スウェーデンのAftonbladet（アフンブラーデット）という新聞社。2017年のツアーで、ここでレクチャーされた方が、「5年たったら紙の新聞はなくなるだろう」と話して、聞いていた人はびっくりしたそうです。2017年の話だから、もう8年経っています。今どう変わっているのでしょうか。

デジタル関係で出かけていきたいと思う所は他にもあります。CONPT-TOUR2024で見学した印刷工場CPP（コールドセット・プリンティング・パートナーズ）を傘下にもつメディア企業Mediahuis（メディアハウス）です。現在の収入構成比は、紙面70%、デジタル30%だけど、20年代末までにこれを逆転して紙30%、デジタル70%にするとのこと*。関係者の解説を聞いてみたい。

並田 ドイツ・ハンブルクの有力週刊紙Zeit（ツァイト）はDXを緩やかな形で進めるといいいます。日本では、「統合編集」という流れがあるけど、こちらでは、そうではなくて、紙面とデジタルの編集局は別のままだそうです*。こういう所のお考えも聞いてみたいです。

*「共同通信社メディア戦略情報」
No178による

林 CONPT-TOURでは、設備の視察以外に、経営幹部の話を聞く機会をいただくようにしています。海外の著名な新聞社の中に入って、経営課題への取り組みや編集部門、工場内の全体像を見ることができ、どこにも例のないツアーだと思いますが、それがで

きるのは、長年培ってきたCONPT-TOURの知名度や信用によるもので、そのバックに初代会長の岡村さんとボリスさんの信頼関係、木村さん、ワーフェルさんのサポートがあってこそ、なんだと思います。

現在は、ワーフェルさんから引き継いでいただいたWAN-IFRAの方と、折々に連絡を取っています。彼は、ワーフェルさんと同じサポートをする、必要な情報があれば提供する、と言っていて、今後のCONPT-TOURを良いものにしてくれると思います。



【広報委員会—CONPT誌に込めた思い】

司会 では、CONPT誌の編集発行と当会の広報活動を担当する広報委員長、お願いします。

井上 先ほど福島さんがおっしゃったよう



に、JANPSが新しくなって新聞業務に関連する幅広い業種を出展対象に加えたことや、新聞社がデジタル関係に力をいれていることもあって、CONPT誌も掲載記事の幅を広げていくことを考えた。

小誌の売り物のひとつ、「新局長に就任して」で言いますと、これまで寄稿いただけなかったデジタル系の局長に、新たにお問い合わせして実現した例もあります。

福島 新聞社の中でも、これまでの先人の努力によって、CONPTと言え、製作系の皆様にはすぐに分かっていただけても、その他の職域の方々にはあまり知られていないような感じがします。まず、CONPTを知ってもらうこと。デジタルさらには編集、広告、販売、総務関係など、新聞社に広くCONPTの名前が浸透するよう、皆で根気強く努めて

小誌の記事は話のタネ 「美味」の寄稿増えている

「美味あっちこっち」をふり返る
(2020年1月～2025年7月)

- ▼新聞社から寄せられた店や味
 - ・名古屋駅の寿司店、さすがと唸る
 - ・信州“食の看板”おやき
 - ・盛岡「ろうすう麺」あっさり旨味
 - ・札幌穴場のスープカレー
 - ・松本城に近い中華の小さな人気店
- ▼メイン執筆者は広報委員会の委員
CONPT内の寄稿も
 - ・東京では店やスポット14か所紹介
 - ・青森～鹿児島 12の店やスポット
- ▼登場メニューは和洋中ほか多彩に
 - ・銀座と浜松で鰻を食べる
 - ・懐かしい味…あんスパ、いもフライ

いきたいです。

井上 コロナ禍の時期には、目立ったCONPT活動は広報誌だけといった状況で、各所各社にいろいろ原稿をお願いしたり、アンケート調査をやって、その結果を掲載したり、といったことがありましたけれど、最近はどうも“定食中心”みたいになっていると感じています。

広報委員あるいはCONPT関係者だれでもが、ネタを見つけ、新聞社の方に書いてもらう、あるいは自分で書くことができれば…。以前、ある新聞社にあるテーマで執筆をお願いしたら、その部署の方に「取材なら応じる」と言われたことがあります。我々が自分で話を聞いてある程度のボリュームの記事を書くとなると、今は人も少なくなって多忙だし、難しいですね、なかなか。

ただ、小ぶりのコラムながら、ほとんど毎号掲載している「美味あっちこっち」ですが、こちらは最近、新聞社の方からの寄稿が増えました。ありがたいことです。各地の美

味しい店や名物を大いに紹介してほしいと期待しています。

阿部 CONPT誌の記事は新聞社や工場に伺った時、話のタネにもなります。読者となる方々から、どんなテーマがお望みか、聞くこともあります。

井上 新しい企画を募集しています。かつて長期連載した「新聞製作技術の軌跡」のような、当会の名前に沿うような技術ものがあれば良いのでしょうか。「新聞製作技術の軌跡」は2000年ごろまでが対象だったので、その後の軌跡みたいなものを。でも、ライターはいるだろうか。若いライターの発掘も必要ですね。

司会 最近、社内報などの電子化が広がっています。

井上 CONPT誌は紙だから読んでもらえて、資料として保存用の穴もあいている。これがいいのだ！と思いたいです。電子化したら、開くのが面倒だと思われたり、そのまま忘れられたりするところもあるのでは、と心配になります。

【そして、前へ】

司会 いろいろなお話、ありがとうございます。ここで、締め言葉をお願いします。

林 これまでの話にあったように、CONPT50年という歴史には、関わっていただいた皆様の姿や思いがたくさんあります。それが、現在の新聞製作技術を支えていると思います。

あらゆる人に新しく正しい情報を伝える技術が新聞製作技術であり、人が豊かに生活することに欠かせない技術です。その進化のために、これからもさまざまな方に関わっていただき、彩鮮やかに活動を続けていければ、と考えています。

情報を正しく伝える技術—その進化のために

CONPTの歩み

2020～2025

◇2020年(令和2) 会員社42社

*2020年は、新型コロナウイルス感染症が世界的拡大、国内でも4月7日に7都府県に緊急事態宣言が出され、その後対象は全国に拡大した。5月25日までに宣言は解除されたが、感染防止のため密閉・密集・密接の“3密”を避けることが求められ、さまざまな活動が制約を受ける事態が続いた。

CONPTでは新聞社との技術対話、工場見学会、技術研究会などの活動を自粛、CONPT-TOUR2020の派遣も取り止めた。

4月の各委員会の会合、5月の第46回定時総会は書面審議・表決方式とした。その後、委員会などの会合はクラブルームではなく、広い会議室を借りて開催し、一部オンライン方式も活用した。

日本新聞協会技術委員会は7月、翌年に予定していたJANPS2021の開催見送りを決めた。

- 1.10 新聞製作人新年合同名刺交換会(第38回)=320名
- 2.17 JANPSを考える－新しいビジョンを語る会=21社23名
- 5.15 第46回定時総会(書面表決)
- 5.21 CONPT45周年
- 11.16 法人化説明会=出席31社33名
- 12.18 第46回年末全体会議=30社33名、来賓2氏

◇2021年(令和3) 会員社42社

*新聞製作人新年合同名刺交換会はコロナ禍のため自粛。CONPT-TOURも見送り。

- 3.31 木船正彦会長退任
- 5.17 第47回定時総会=35社41名、来

賓3氏

会長に清水英則氏選出(清水製作)

- 7.7 CONPT技術研究会(第10回)「メディア業界のDXなど」=73名
- 7.28 オンライン展示会出展募集説明会=29名
- 8.24 一般社団法人設立総会=31社36名
- 11.16 オンライン展示会出展説明会=22名
- 12.17 第1回年末全体会議=25社29名、来賓3氏

◇2022年(令和4) 会員社40社

*新聞製作人新年合同名刺交換会はコロナ禍のため自粛。CONPT-TOURも見送り。

- 2.14～28 CONPTオンライン展示会開催=17社出展
- 5.19 第2回定時総会=30社39名、来賓3氏
事務局マネージャー大石高廣氏退任、木暮喜彦氏就任
- 7.8 CONPT技術研究会(第11回)「新事業 クラフトビール」=59名



- 7.20 技術懇談会(第127回)椿本チエイン埼玉工場見学会=21名
- 11.18 CONPT技術研究会(第12回)「スマートシティ」=28名
- 11.29 技術懇談会(第128回)「尾崎元氏講演会」=14名
- 12.16 第2回年末全体会議=29社34名、

来賓3氏

◇2023年(令和5) 会員社37社

*新聞製作人新年合同名刺交換会はコロナ禍のため自粛。CONPT-TOURも見送り。

- 2.21 技術対話(第11回)日本新聞協会、情報技術部会・印刷部会
- 3.3 CONPT技術研究会(第13回)「if Link」=29名
- 3.9 技術懇談会(第129回)「日本経済新聞社・大阪工場見学会」=15名
- 5.23 第3回定時総会=27社36名、来賓3氏
- 7.7 CONPT技術研究会(第14回)「LIMEX」=40名
- 9.21 技術懇談会(第130回)「尾崎元氏講演会」=35名
- 9.27 日本新聞協会技術委員会は翌年に予定していたJANPS2024の開催見送りを決定。
- 11.16 技術懇談会(第131回)「徳島新聞印刷センター見学」=13名
- 12.11 第3回年末全体会議=26社37名
来賓3氏

◇2024年(令和6) 会員社34社

- 1.12 新聞製作人新年合同名刺交換会
4年ぶり開催(第39回)=239名



- 3.14 技術懇談会(第132回)「全日空機体工場見学会」=19名
- 5.16 第4回定時総会=23社31名、来賓3氏

氏

- 5.30~6.6 CONPT-TOUR2024 8年ぶりに開催されたdrupa2024(デュッセルドルフ)視察とドイツ、ベルギーで新聞社、印刷工場見学=参加者15名に事務局、添乗員1名の総勢17名
- 7.5 CONPT技術研究会(第15回)「富山県が生成AIとマルチモーダルAIで挑んだ働き方改革」=50名
- 7.22 CONPT-TOUR2024視察報告会=68名
- 10.3 技術懇談会(第133回)「尾崎元氏講演会」=30名
- 11.8 CONPT技術研究会(第16回)「生成AIでビジネス変革」=41名
- 11.14~15 製作技術研修会。日本新聞博物館、読売新聞鶴見工場見学=新聞社36社66名、新聞協会2名、会員社18社34名
- 12.10 第4回年末全体会議=23社33名、
来賓3氏

◇2025年(令和7) 会員社33社

- 1.10 新聞製作人新年合同名刺交換会(第40回)=240名



- 2.19~21 JANPS in page2025(サンシャイン文化会館)新聞社3社、会員社10社、非会員社4社、事務局出展
- 5.20 第5回定時総会=23社31名、来賓3氏

*会員社数は1月1日時点

新局長に就任して

新聞技術で新しい挑戦

岩手日報社 執行役員 総合メディア局長
高橋 直人

岩手日報社総合メディア局は、制作センター印刷部、システム部をはじめ、デジタル戦略部、デザイン室、+（プラス）日報事務局、コンテンツ事業部－の6部で構成し、けっこう守備範囲が広い。



今春、コンテンツ事業部長から局長に就任した。慣れない専門用語に苦しみながらも新聞製作の現状を学ぶ毎日だ。新聞業界を支える関係企業の皆さんと議論をし、未来を考える日本新聞製作技術懇話会の輪に加わることができることは、自身の大きな糧となると思っている。

1992年（平成4）の入社以来、主に編集畑を歩んできた。前任の4年間は著作権、クリッピング、出版、データベース業務を担当。新聞記事等を活用した収益事業拡大に奔走してきたが、これと言った答えが見つからないまま。やはり新聞の魅力を幅広い世代に届けるには、新聞そのものと、それを作り刷る製作技術が根本にあることを実感している。

＊

改めて言うまでもないが、新聞メディアを取り巻く環境は大きく変化し、地方紙にとってはさらに厳しい状況が続いている。発行部数の減少という全国的な傾向に加え、インターネットやSNSを活用した情報収集がより一般化し、新聞の存在意義そのものが問われている。さらに追い打ちをかけるように、ガソリンやインフラ設備等の高騰が、新聞経営のかじ取りを難しくしている。

岩手は広大な県土を有するうえ人口密度が低く、紙の配達網を維持するコストが他地域に比べて高いことも課題。少子高齢化や人口減少の進行が避けられない現代社会の中で、これまで以上に「制作の効率化」「デジタル化の推進」「生成AIの適正な活用」などが問われ、持続可能な収益構造の確立に向けた組織体制の見直しが急務の状況だ。

こうした課題の解決を支えるのが、新聞製作技術の進歩だ。優れた技術は新聞の質を高め、読者の信頼を得るための重要な礎。例えば、紙面の美しさ、正確な印刷時間は、信頼を揺るぎないものにするし、気候変動などの問題意識が高まる社会では、環境に優しい印刷を実現することも重要だ。新聞製作に携わる私たちには、効率向上や新技術の導入に挑戦する一方で、読者が「読んでよかった」と思える価値を紙面でも提供しつづけるという目標を共有することが必要だと思う。

2011年3月の東日本大震災で岩手日報は、避難者名簿と生活情報を毎日掲載した。被災者（読者）が何を求めているかを突き詰めた結果だ。販売センターの何店かは津波被害を受けたが、発行本社と他の販売センターの全面協力で読者に紙面を届けた。紙面づくりでも、停電で制作センターでの印刷が不可能となったが、東奥日報（青森）、秋田魁新報の協力で紙齢をつなぐことができた。技術と人の輪の結晶とも言える。

新聞業界全体がかつてない変革期にある今の新しい時代には、新しい挑戦が求められている。新聞の未来を切り開くためにも、最新技術の導入による効率化が欠かせない。その意味でも関係企業の皆さんとのさらなる連携が鍵になる。この変革に向けて果敢に挑戦しつつ、懇話会の皆さまとの議論を通じ、技術の可能性を最大限に広げるために学び、共有し、課題解決に向けた歩みを進めていく決意です。どうぞよろしくご厚意を申し上げます。

学び続けて実践へ

河北新報社 技術局長

阿部 好彦



今、新聞業界を取り巻く環境は厳しい時代にあります。紙やインクといった資材の価格高騰、人件費の増加など、かつてないほどの環境変化に直面しています。いかに品質を保ちつつ、安定したサービスを継続していくかが、全ての現場で問われています。

こうした中、弊社では現在、システム更新に直面しています。従来の仕組みをそのままリプレイスすれば、大幅なコスト増は避けられず、検討メンバーが日々知恵を出し合い、費用削減に向けて取り組んでいます。

同時に、将来を担う若手の育成と、現メンバーのスキル向上は欠かせません。一人一人が日常的に学び、挑戦し、成果を共有できる環境や仕組みを整えること。そして、全員が同じ目的意識を持って取り組むことが求められています。

新聞社が持つ地域とのつながりや信用は、他業種にない大きな強みです。技術者も積極的に社外との接点を持ち、地域コミュニティなどの場に参加し、自らの取り組みを発信していくことも重要です。そうした姿勢は、技術力の向上だけでなく、自社の取り組みを広く伝える技術広報となり、あらたなビジネスの創出にもつながると考えています。

*

入社してから新聞制作や出力、集配信といった汎用コンピューターに囲まれた中で、基礎的な部分から運用面に関する部分までの上流工程を担ってきました。中でもMVSとい

う基本ソフトの上で動く仕組みに多くの時間を費やしました。その後も新聞制作システム中心の業務に取り組んできました。

昨年度担当したシステム開発部では、システム更新業務に加えて、新たにWebコンテンツ開発などWeb関連の業務が加わりました。クラウドサーバーのコンテナ化、IaC（インフラリソースをコード化して管理する）という言葉が飛び交い、正直、インターネットで検索しながら言葉を理解する日々でした。新しい仕組みに触れていく中で、入社したころに学んだコンピューターの構造的な思考、資源管理、自動化といった基本概念は、現在のクラウド技術やIaC、コンテナといった現在の技術にも通じる考え方だったと感じています。

*

技術は日々アップデートされています。クラウド、生成AI、ネットワーク、セキュリティなど、次々に登場する新しい概念や手法は、これまでの経験だけでは足りなく「学び続け、実践していかなければならない」ものであることを日々痛感しています。

業界全体で同じ課題を抱える中、他社の方々との情報交換や協力関係の重要性も増しています。立場を超えた技術的な連携や交流も欠かせません。新たな気づきや実践のヒントを得る機会にできればと思っています。

まだまだ学ぶことが多くあります。どうぞよろしくお願いいたします。

余談になりますが、この春、娘が勤めていた仕事を辞め専門学校に通い新たな夢へ向かって歩き出しました。フットワークの良さ、前を向く姿勢には頭が下がります。私もまだまだ老け込む年ではないと刺激を受けています。凝り固まった思考をほぐして物事と向き合っていかななくてはと考えています。

創刊150年へ向け地域と共に

山陽新聞社 制作技術局長
山陽新聞印刷センター 代表取締役社長
秋山 茂男

制作技術局長に就任し3か月が過ぎました。局長職務や新しい業務に追われ緊張の毎日が続いています。

本州と四国を結ぶ瀬戸大橋が開通した、1988年(昭和63)に入社しました。制作局製作部、入力部、システム部、編集局校閲部、整理部と新聞製作部門で勤務、大きく変わる社内改革の中で販売局(現在の読者局)へ異動となり、この度制作技術局へ戻ってきました。



*

入社の際は、新聞製作システムの変革時期で、編集局と制作局(当時)の共同で行われていた新聞組版を、編集局の単独組版へ大きく舵を切っていた時期でした。新たに導入される機器も専用機種から、汎用性のあるパーソナルコンピューターへと変わり、急速に効率化が進みました。定型素材の「自動組みシステム」の構築など、厳しい先輩の指導を受けながら、スポーツ関係の自動組みの作成に汗をかきました。目まぐるしく変わる職場に「この職場はこれからどうなるのか…」と不安を覚えたことを思い出します。

効率化が進む中、販売局(現読者局)への辞令を受け、何となくベールに包まれた職場に見え不安でした。今までの異動とは全く別もので、私にとって新しいページの始まりでした。「本社と販売所は車の両輪」を学び、販売所長さんたちと読者拡大へ向け悪戦苦闘の日々でした。「迅速、着実、丁寧に」を掲げ、戸別配達網を維持し、読者に新聞を届けることに注力しました。分厚い正月紙面の配達や、中面を見なければわからない地域版の配り分

けなど、実際に経験、新たな課題に衝撃を覚え、もっと視野を広げる必要性を感じました。「読者へ新鮮なニュースを」と、各社の現地印刷が活発化し競争が激化した時期もありましたが、購読者の減少が続く中、競争から共創へ流れは大きく変わり、新たな営業手法の創出が必要です。販売は、読者や地域の人々と触れ合う機会が多く、課題もありますが、弊社の創刊精神である「地域と共に」を実感できた時間でした。

*

制作技術局は、システム部と工程管理部で組織しています。システム部は新聞製作システムをサポート、工程管理部は印刷から店着までを管理します。安定稼働が必要不可欠である新聞製作システムを、スタッフに教えてもらい勉強中です。また、印刷現場からはトラブル報告書がメールで届きます。こちらもわからないワードが…、内容がよく理解できず、用語集片手に四苦八苦しています。状況把握ができないことは致命傷で、大きなストレスを感じていますが、もうしばらくはこの状況から逃れられないと思います。

売上が難しい状況で、設備投資費や維持経費は高騰し続けています。この中で新聞製作システムや高品質紙面の維持、販売所への安定店着を守らなければなりません。新聞製作システム、印刷システム、新聞輸送網、販売所を安定して繋ぐことで、読者に新聞を届けることができます。この毎朝繰り返される奇跡のような連携が重要で、積み重ねることで読者の信頼を得ることができると考えます。

新聞業界を取り巻く環境は今後も変わります。私自身も今まで以上に変わらなければなりません。生産体制の効率化を図りコスト圧縮へさらなる挑戦が必要です。若い頃のような熱量で走り続けることは難しいですが、後ろ向きにならないよう、創刊150周年へ向け地域新聞社の役割を果たしていきます。

力を合わせ 難局を乗り切る

日本経済新聞社 製作本部長

加藤 謙一

入社は1991年(平成3)、配属先はシステム局技術部で新聞製作下流の技術部門。2年ほど、製作企画部長で資材関連の部署に在籍したが、ほぼ技術部門一筋でやってきた。振り返れば、新工場の立ち上げ、生産設備の更新、輪転機の増設、新しい資材の共同開発などさまざまな経験をした。



現状はどうか？ 印刷部数は下落の一途をたどっており、それに連動するかのように輪転機をはじめとする主要な生産設備をできるだけ長く使うために、延命化整備や工場運営の効率化など、やるべきことが変わってきたと感じる。何か後ろ向きのように見えるが、技術者目線で考えると環境の転換期こそ、視点を変え新しい技術の発掘や創意工夫などアイデアを出し、生産設備や資材の延命、効率化、省エネ、環境負荷軽減などコスト削減や省人化を図ることができるのではないかと。

弊社の技術部員には「新技術・コスト削減」と題して定例会を開催してもらっている。特に先入観が少ない若い部員にはこれまで当たり前のように行ってきた仕組みや業務に疑問を投げかけてもらい、中堅部員の固定概念や当たり前を敢えて変えるようにしている。各自アイデアを持ち寄って上下関係なくブレインストーミングすることが重要だ。まだアイデア出しの段階が多いが、比較的ハードルが低いものから実用化している。その際、「新聞技術」に投稿された新聞各社の技術情報も大いに参考にさせていただいている。

*

新聞業界全体が印刷部数減少の厳しい状況にある中、新聞社だけでなく、これまで二人

三脚でやってきたメーカーも厳しい状況におかれているのも事実だ。メーカーの新聞事業の縮小や撤退という現実、事業の採算性を考えるとある意味仕方がないであろう。このような構造的な課題について新聞社がどう向き合っていくかで、これからの新聞業界の未来は変わるのではないかと。メーカーとの共存共栄、新規参入メーカーの取り込みや新聞各社の技術力を結集することで生産設備の供給体制とメンテナンスの維持を図りたい。

弊社では自前でできる整備は自前でやる「直す工場」プロジェクトを立ち上げている。これまでメーカーで行っていた整備工事のうち内製化可能なものを選び、メーカーの技術協力を得ながら進めている。これは単なるコストの削減だけでなく、メーカーの技術者の高齢化による人員不足に対しても有効ではないかと考えている。専門部隊の技術力も年々アップし、作業範囲も増えている。

また、弊社では新聞生産管理システムの再構築を22年から進めており、26年春の本番稼働を目指している。本システムは新聞製作に必要なさまざまな情報を社内システムや工場と結び、新聞安定発行を担う最重要システムとして位置付けている。現在、製作本部挙げての一大プロジェクトが進行中だ。システム構築はこれまでのオーダーメイドによるスクラッチ開発ではなく、ローコード開発を選択。開発に当たっては技術部員や業務の実務者が一緒になって機能の一部を内製開発し、本部内のデジタル人材の育成も進めている。

私自身、良い時代の恩恵を享受してきた。今後も紙の新聞事業をサステナブルにしておくためにもメーカーや新聞社同士が力を合わせて、この難局を乗り越えて未来に向かっていければと思う。最後になるが、日本新聞製作技術懇話会が今年5月で創立50周年を迎えたことに、この場を借りて祝意を申し上げるとともに、新聞界の発展に私自身も微力ではあるが尽力したい。

縁と絆に恩返し

福島民報社 システム・グラフィック局長
高橋 英毅

くるくると絡み合う鑽孔(さんこう)テープ、びっしりと並んだ活字、ツーンとしたインキと油と汗の匂い…。小学生の頃、某新聞社で論説を担当していた父に連れられ、制作の現場を見学した。見た目はなんとも無骨な職場ながら、活気があるな、と感じた。あれからざっと半世紀。時代とともに形は変わったが、今その現場に私が立っている。



*

1989年(平成元)に入社した。編集畑30年、うち整理20年。制作畑に移ってからは5年が過ぎた。初めは割付用紙に倍数尺、手貼りの時代だった。整理記者と制作局員が二人一組で紙面を組む「立ち合い組み」をしていた。しばらく後、手貼りの紙は電子画面とプロッターに代わり、やがて記者が一人で組む整理組版に移行した。思えば、技術は変遷しても、我々のすぐ隣には常に制作局の仲間がいた。何事にも一緒に向き合い、心がつながっていた。

東日本大震災が起きた2011年3月11日は朝刊デスクをしていた。当時は労組の委員長もしており、情報が錯綜し、余震も続く中、何とか自分を落ち着かせつつ関係部署や組合への連絡と指示に身を砕いた。本社から離れた場所にある印刷センターは激しい揺れでオフセットの漏水が発生。輪転機は回せたものの、いつ止まるか分からず、最悪の事態に備えて短時間で何版も紙面を組み、降版した。

あまりにも極限の状況で、記憶は定かでない。ただ、「新聞を必ず出す」「紙齢を途絶えさせない」という思いは編集、制作、印刷の垣根を越えて通じ合っていた、そんな使命感

と連帯感があったことを確かに覚えている。

初めて制作現場に身を置いたのは総合メディア局次長の時だった。技術の知識はほとんどなく、専門用語と格闘する日々。その当時、弊社のデジタル戦略はかなり出遅れており、全国の地方紙の中では最後発の位置にいた。新設されたデジタルメディア局の局長に就いたのを機に紙面ビューアと公開データベースを立ち上げ、わが社のデジタル事業の基盤を整えた。システム・グラフィック局長となった今も、最新の技術と情報には貪欲でいたいと心掛けている。

*

そんな中で改めて気がついた。整理時代は全てがお膳立てされた環境にあったことを。出稿PCも組版端末も通信機材も、制作局の努力により、いつも万全の状態に保たれていた。だからこそ有事でも整理作業に集中できた。制作局は第一に、新聞システムの安定稼働を至上命題としている。その矜持は揺るぎなく、局員たちに脈々と受け継がれている。

「紙もデジタルも」の時代となって久しい。制作現場の重要性は従来以上に増している。ウェブやサブスクといったデジタル分野だけでなく、紙を含めた総合的なメディア戦略が問われる。だが、依然として技術者不足の問題は悩ましく、技術革新の手詰まり感もある。業務環境の改善は喫緊の課題として迫る。

*

前述の父は某社で工務局などの局長も務めていた。実は妻の父も弊社で制作部長をしていた。時代は違えども、私は今同じ立場にいる。果たして追いついたのか…。言えるのは、新聞の編集と制作の両方に携われたこと、新聞づくりの要所要所にいられたことは運命的な縁なのだと思う。併せて、局や職域を越えて育んだ絆が背中を押してくれていると感じる。今後は、より良い制作職場づくりを通じて恩返し—こんなことを心に描きながら歩んでいきたい。

変貌の最適解 見出したい

南日本新聞社 経営企画局長兼印刷局長
南日本新聞印刷 専務取締役

鷗木 こう平

この4月、印刷・発送の現場経験がない私が印刷局長を拝命することになるとは。印刷局員はもちろん社内を驚かせたことと思う。何せ、当の本人が誰よりも困惑している。



とは言っても、特に南日本新聞社の100%子会社であり、当社グループ唯一の新聞印刷部門である南日本新聞印刷(以下、印刷KK)との関りは深い。

印刷KKは今年創立16年を迎えた。2009年(平成21)4月創立の1年前、編集、広告などを経て6年ぶりに経営企画局に戻り、経営企画担当として携わった最初の大きな案件が印刷部門の分社化、印刷KKの立ち上げだった。

定款、就業規則の作成から人事・経理業務の運用まで、会社設立に伴う全ての作業に携わらせてもらった。30代半ばの私には貴重な経験だった。中でも資本金を900万円に設定したのは最大の貢献だったと自負している。当時の消費税法では資本金1,000万円以下の事業者は、最大2年間消費税納付が免除される特例があった(現在は改正されている)。当時の印刷KKの売上高は15億円以上あったが、この資本金の特例を利用してトータル3,000万円以上のキャッシュを残すことに成功した。以降、2014年の法改正までこのスキームを採用して設立された印刷子会社もいくつかあったと聞く。

8年後には印刷局付外向の形で印刷KKに直接関わることになる。発令内容は同社総務部長。メインの役割は、グループ内の印刷部門統合と安定運営だった。

当時、当社グループには印刷KKを含め3つの印刷関連会社があった。うち1社を清算し、その従業員を印刷KKが吸収。別の1社からは出向者を受け入れる形で印刷部門の1社統合を図った。

振り返ると、困難を極めたのが人事面。統合により従業員数は一気に100人を超えた。さらにプロパー社員のほかに清算した孫会社からの転籍社員、南日本新聞社からの出向者、別の子会社からの出向者、派遣社員一と、5種の従業員が混在するモザイク組織になった。様々な苦労があったのも確かだが、無事に統合できたのは、従業員各人がその意義を理解し、協力してくれたおかげと感謝している。

統合翌年の2018年には、新工場稼働で3工場4セット体制に。「多拠点化による経営の非効率化」という難題も発生した。その対応策として、各工場に庶務を置かず、1人で人事、給与、経理、出納の作業をこなす選択をした。事務部門に限らず、毎年、人員の適正化を意識しながら工場運営する精神は、今も印刷KKに引き継がれている。

多忙な中でも良き思い出は、新卒社員の採用だった。既に売り手市場だった高卒新卒者採用のため県内の高校を行脚した。無事、採用できた喜びは今も忘れない。同時に、我が子よりも若い青年の人生を引き受けることへの緊張感も味わった。

今回、6年ぶりに戻った印刷KKでは、かつての新入社員たちが頼もしく成長してくれている。中には家族を持った者も。専務取締役として、改めて従業員の生活とその未来を守ることへの重い責任を痛感している。

日本企業の生存率は20年後で50%という。144年続く南日本新聞社は形を変え生き残るだろうが、紙の新聞を印刷する創立16年の印刷KKはどのような変貌を遂げるべきなのか? 経営企画畑で長く過ごし、生まれる前から見てきた印刷KKに戻った今回の異動で、必ずやその最適解を見出したい。

第5回 定時総会を開催

日本新聞製作技術懇話会

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は5月20日、日本プレスセンタービルの日本記者クラブ大会議室で第5回定時総会を開催した。日本新聞協会から技術委員会の近藤るみ委員長(毎日新聞社)、勝田洋人編集制作部長、桜井哲也編集制作部技術・通信担当主管の3氏を来賓として迎え、会員社22社31名(オンライン参加7名を含む)が出席した。

開会の挨拶で、清水英則会長は「CONPT創立50周年という大きな節目の年を迎え、当会を支えてこられた会員社の皆様、日本新聞協会のご支援に心より御礼申し上げたい」と語り、「今後は、持続可能な事業運営に向けた体制構築が重要な課題であり、CONPTをしっかりと継続・存続させていくことが大きなテーマになる」と強調した。

近藤技術委員長は「技術の発展は、まさにCONPTの皆様との二人三脚で築いてきた」として感謝の意を示すとともに、紙の新聞を

出し続けることの重要性に触れ、「発行継続には効率的なシステムの活用が不可欠である」と語り、キーワードとして「マルチユース」および「マルチカンパニー対応」を挙げ、メーカー・ベンダー各社からの積極的な提案に期待を寄せた。

勝田編集制作部長は、CONPT創立50周年について、「長きにわたり業界の発展に貢献されてきた会員社の皆様に、改めて敬意を表したい」と語った。JANPS in page2025や製作技術研修会の開催について、充実した内容で好評を得たと評価。「コロナ禍を経てメーカーと新聞社との連携が新たな形で深まりつつあることを実感している」として、「今後も一層の協力をお願いしたい」と述べた。

2024年度の事業報告は、清水会長の全体報告の後、評議委員会および3委員会から報告があった。議案は2025年度の事業計画など5件で、いずれも原案通り承認された。

総会後に開かれた理事会では、清水英則氏が代表理事(会長)に、林克美氏および並田正太氏が副会長に、それぞれ選任された。

【CONPT2025年度事業計画の概要】

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は、創立50周年という節目の年を迎え、次の時代を見据えて新聞業界を取り巻く環境の変化に対応した取り組みを推進する。新聞社との「技術対話」はタスクフォースとしての活動を解消し、既存イベントの中で柔軟に展開する。

▽JANPSなどのイベント = 新聞社に最新最適な技術情報を提供し共有する場として「製作技術研修会」を開催する。信濃毎日新聞社松本印刷センター見学を中心に10月実施。

JANPSは来年2月に予定されるpage2026とのジョイントを視野に、出展意向調査の結果を踏まえ、方向性・実施の可否を判断する。

▽技術懇談会 = 会員社を対象に、6月に西日本新聞社の製作センターを見学、プロダクト事業の説明、懇親会を実施。あわせて西研

グラフィックスを見学。

新聞社との交流を深める場として、最新技術などの知見を得られる講演会を計画する。

▽CONPT技術研究会 = 技術委員会の開催日である11月7日(金)および2026年3月13日(金)を候補日として調整を進める。

▽会報CONPT発行 = 創立50周年特集号を含め、2025年度は年5回の発行を予定。

▽CONPT-TOUR = 2025年度は実施を見送り、次回開催へ向けてニーズの把握、候補となる訪問先に関する情報収集を続ける。

▽組織拡充の施策 = 新聞社と会員社が対面で交流できるイベントを企画して、CONPTの存在意義を高める。JANPS等により新規入会を促し、組織の拡充をめざす。

福州軒（松本市）

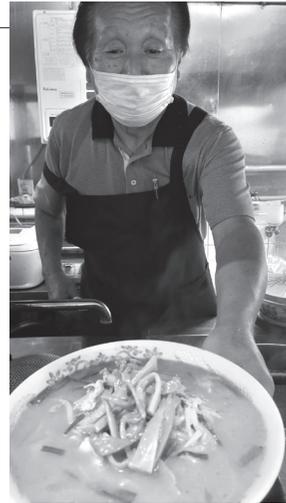
松本城から歩いて数分の「東小路」にひっそりとのれんを掲げる「福州軒」。カウンター7席、小テーブル二つの小ぢんまりした店だ。約40種のメニューで一番人気はみそ系。みそチャーシュー、みそ野菜の注文が多いという。マスター井口泰造さん(74)は「料理に特にこだわりはない」と謙遜するが、みそは一貫して福島県会津若松市産。やや太めのめんに合う、甘みのあるみそに行き着くまで信州産含め十銘柄を試したという。炒めた豚肉やもやし、ニラ、玉ねぎともほどよく絡む。銘柄を変えると常連客がすぐ気づくほど定着した。

隠し味は安曇野市穂高産の青唐辛子。赤くなるまで熟成させ、粉末にしている。「辛いのは大丈夫？」とお客に一声掛けてからどんぶりに。「雑味がなくてピリッとしているのがいい」と井口さん。二日酔いの時は多めに入れてもらい、一汗かくと気分爽快になる。

店は1960年代中頃に両親が開業。井口さんが東京の大学に通っていた70年代後半、母が体調を崩し「就職がまだ決まっていなければ戻ってこないか」と父に言われ帰郷した。テーブルが六つもあった店は、その後カウンター中心に改造。現在は妻美和子さんと切り盛りする。常連客は近くにある市役所職員が多い。

席に着いたお客に出てくる山菜などの小

美味あつちうち



雑味がなくてピリッと

皿は、市内の山間部で美和子さんが採ってくる。春はフキやウド、秋はキノコ類など。5月下旬のこの日はワラビのお浸しだった。小皿のほかに食後のコーヒーも無料。夏も冬も「ホット？ アイス？」と好みを聞いてくれる。

諸物価高騰に耐えていたが、常連客に「ぼちぼち値上げしたら」と言われ、昨年50円だけ上げた。それでもみそラーメンは750円。「最近、若いお客が急に増えたのよ。ライスに目玉焼きが載っているのがいい、とSNSで紹介されたみたい」と美和子さん。棚に劇画「ゴルゴ13」の単行本が30冊ほどあり、テーブルには信濃毎日はじめ日刊紙が3紙もあるのがうれしい。日祝日休み。

◇第2回製作技術研修会を10月開催

日本新聞製作技術懇話会は、信濃毎日新聞社の協力を得て、同社松本印刷センターの見学を中心とした第2回製作技術研修会を10月に開催します。この研修会は製作系実務者の交流と知識・情報共有を目的として昨年秋に初めて実施、高い評価を得ました。

▽1日目 10月23日(木)

技術セミナーおよび懇親会

▽2日目 10月24日(金)

松本印刷センター見学・設備説明＝東京機

械製作所の輪転機「COLOR TOP ECOWIDE II」2セットを直列配置

(問い合わせはCONPT事務局まで)

会員消息

■担当者変更

*富士通(5月7日付)

「新」吉村 寛氏

(デジタルメディア事業部マネージャー)

「旧」田中 裕哉氏

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (33社) 2025年6月現在

社 名	〒番号	所 在 地
株イワタ	101-0032	東京都千代田区岩本町3-2-9
株インテック	135-0061	東京都江東区豊洲2-2-1 豊洲ベイサイドクロスタワー
株金陽社	136-0082	東京都江東区新木場1-1-1王子木材緑化ビル1階
コダック(同)	140-0002	東京都品川区東品川4-10-13KDX東品川ビル
サカタインクス(株)	112-0004	東京都文京区後楽1-4-25 日教販ビル
株システマック	520-2277	滋賀県大津市関津4-772-17
清水製作(株)	108-0023	東京都港区芝浦3-17-10
ストラパック(株)	221-0864	神奈川県横浜市神奈川区菅田町2800
西研グラフィックス(株)	842-0031	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉田135
第一工業(株)	335-0002	埼玉県蕨市塚越7-2-8
椿本興業(株)	108-8222	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル30階
株椿本チエイン	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階
DICグラフィックス(株)	103-8233	東京都中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル
東京インキ(株)	114-0002	東京都北区王子1-12-4 TIC王子ビル
株東京機械製作所	108-8375	東京都港区三田3-11-36 三田日東ダイビル6階
東芝デジタルソリューションズ(株)	212-8585	神奈川県川崎市幸区堀川町72-34 ラゾーナ川崎東芝ビル5階
東洋インキ(株)	173-0003	東京都板橋区加賀1-22-1
東和電気工業(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6階
ニッカ(株)	174-8642	東京都板橋区前野町2-14-2
日本電気(株)	211-8686	神奈川県川崎市中原区下沼部1753
日本アイ・ビー・エム(株)	103-0015	東京都中央区日本橋箱崎町19-21
日本新聞インキ(株)	210-0858	神奈川県川崎市川崎区大川町13-8
日本通信機(株)	270-1198	千葉県我孫子市日の出1131 NEC我孫子事業場内
日本ポールドウィン(株)	108-0023	東京都港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階
パナソニックコネク(株)	224-8539	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地
株フジオ産業	115-0043	東京都北区神谷2-6-8
富士通(株)	212-0014	神奈川県川崎市幸区大宮町1-5 Fujitsu Uvance Kawasaki Tower
富士フィルムグラフィックソリューションズ(株)	106-0031	東京都港区西麻布2-26-30富士フィルム西麻布ビル
富士薬品工業(株)	176-0012	東京都練馬区豊玉北3-14-10
HOUSEI(株)	162-0821	東京都新宿区津久戸町1-8 神楽坂AKビル9階
三菱重工機械システム(株)	729-0393	広島県三原市糸崎南1-1-1
三菱製紙(株)	130-0026	東京都墨田区両国2-10-14両国シティコア
明和ゴム工業(株)	146-0092	東京都大田区下丸子2-27-20